

第2部 シンポジウム

泉幸江氏：千葉県手をつなぐ育成会権利擁護委員会委員

親の立場でお話させていただきます。肩書として千葉県手をつなぐ育成会権利擁護委員会の会員で、知的障害者の親です。NPO 法人成年後見センターしぐなるあいずを立ち上げ、活動しています。立ち上げにあたり、本日登壇されている佐藤先生が代表を務められました PAC ガーディアンズにご指導いただきました。佐藤先生は私にとっては大恩人です。

息子は30代、最重度の知的障害と身体障害があり、寝たきりで、言葉もありません。この2年間はずっと息子の介護をしていました。津久井やまゆり園の事件が起きた時、息子が津久井やまゆり園にいれば、一番最初に選ばれたかなと感じました。それがこの事件を聞いて最初の感想です。私は親ですが、個人的な感想しかお話できません。私自身、津久井やまゆり園に行ったことがありませんし、新聞報道くらいしか知りません。これは違うぞということもあるかもしれませんが、その時はご了承ください。

入所施設は、親にとって建物の安心感、職員の多さの安心感がありました。最後は入所施設かなと思っていました。私は松戸市に来て20年経ちますが、息子はグループホームに入れて、地域で生きていきたいと考え、それを目指してきました。成年後見センターも立ち上げました。この事件を見た時に、入所施設も安全ではないと再認識しました。袖ヶ浦で職員の暴行による死亡事件がありました。あの事件は施設の中での事件だったので、息子には関係ないと思っていました。今回の津久井やまゆり園に関しては、外から来た人が事件を起こしたというところで、施設について考えさせられる事件でした。報道を聞いている中で、職員が務めている時に何かあったのではないかと、施設の中で何か対応がとられなかったのかなと考えました。

亡くなったご本人の生きた証が何もありません。匿名で報道されていますから、私が都内で暮らしていた時の知人がいたかもしれませんが、わかりません。その方がその後どうなったかも追うことができません。息子と同じ施設や同じ所で暮らしたことがあった方だと思ったら、お友達としてお悔やみを言いたいと思っても、今の状況では言えません。生きた証がないことが親として切ないし、辛いなと思いました。こんな事件は二度と起こして欲しくないというのがみんなの思いです。これを風化させないために何かの手立てを考えないといけないと思いました。

入所施設も生活の質を高めれば、選択の一つとして残っていくと思います。私は息子が寝たきりになってしまい、老障介護の状態にいます。息子の親亡き後をどうしようかが私の一番のテーマです。10年前に5人の親が集まり、親亡き後をどうしようかと考えた時に宮代先生の成年後見制度の研修がありました。研修を受けて、この制度を使えば親亡き後はなんとかなるのではないかと、何の根拠もなく考えてしまいました。

しぐなるあいずは、「障害者の親亡き後を支える」を理念に事業をしています。啓発活動、受任活動をしています。現在、100件以上の受任をしています。司法の専門職（弁護士、

司法書士)、福祉の専門職(社会福祉士)、この専門職と言われる方と市民の方とペアを組んで、一人の方の後見人として活動していただいています。この仕組みの中で障害者を支えていきたいという思いで活動しています。法人が受けた案件を専門職、市民の方、事務局と皆でチームを組んで支える仕組みにしています。市民の方には、研修を受けていただいています。養成研修は、市の障害福祉課からの委託で2年に一度行っています。研修の中で一番力を入れていることは、障害者理解です。障害者の生活と一緒に生活をしたことがない人にとっては想像がしづらいことだと思います。研修だけでは難しいですが、実際の現場にも同行していただいて養成しています。実際協力委員として活動しなくても、研修を受けた市民の方が増えていきます。これから障害者が生活していく中で、障害を理解している人を増やす良い手段だと思います。共生社会に繋がる活動になると自負しています。

共生社会といっても皆さんのイメージはどんなイメージでしょうか。障害のある人もない人もみんな一緒に住める社会というような、ぼんやりとしたイメージしか私にはありません。どんな人でも個人を大切にする社会であって欲しいと思います。多様な価値観を認める社会、それがあってしかるべきと思っています。息子は一人の個人として存在し、一人の市民として存在して欲しいです。支援されていても一人の市民です。それが保証されるためには、息子一人ではできません。サービスを使うにあたってもお金の管理、契約が必要です。その中で誰がそれを担ってくれるのかというと、私は成年後見人だと考えています。ただ、成年後見制度も課題があり、いい制度になるためにはどんどん使って、より良いものに変えていかないと、受け手がいない状況があります。報酬が高く払えないということもあります。課題はありますが、これに代わる制度がないのでなんとか良い制度にしていきたいという思いで活動を続けています。後見人は誰の代理なのか、本人の代理です。親は子のことを一番知っていると思っていますが、制度を学んだことで人格は違う、息子は息子、息子は一人の個人だと突き付けられて、自分の考えが違っていたなと考えました。市民の方に成年後見制度を学んでいただくことで、障害者も一人の市民、尊厳を持った人格だと理解してもらえます。今後も啓発活動をしていきたいです。障害者はいくら支援されていても、人の役に立ちたいと思っています。うちのように重度の息子でも何かの役に立ちたいと思っているに違いないと確信しています。何かの役に立つところを見つけてくれる後見人が見つかるといいなと思っています。私の親の思いです。本人の了解はとっておりません。本人の権利を侵害していることになると思いつつ話しています。このように気が付かないということはたくさんあるのではないのでしょうか。気が付かないことを皆さんで切磋琢磨しながら考えていくというのがこれからの時代だと思います。私が教育を受けた時代は、正論があれば、それに反論することが非常に難しかった気がします。それがアメリカ人の学校に行った時、アメリカ人の人達は意見を堂々と言っているのを見て、何でも言っているんだと学びました。本日も恥ずかしいと思いつつ思いを述べさせていただきました。

佐藤彰一：PAC法律事務所弁護士／國學院大學教授

自己紹介はプロフィールに書かれている通りです。いろいろな大学を転々として、弁護士もしたり、全国権利擁護支援ネットワークの代表をしたり、先程泉氏よりお話があったPAC ガーディアンズ（法人後見の組織）を立ち上げたり、あれこれやっております。基本属性は知的障害者の父親です。子供は現在28歳で支援区分6、療育手帳は○A—2、船橋にて親子で暮らして何年も経ちます。

泉氏のお話は極めて篤いです。お母さんは篤いです。父親は接している時間が短いというか、あまり良い父親とも言えないのですが、いろいろと活動する中で自分の専門に絡めて考えさせていただいております。

今日は津久井やまゆり園の話ということで、障害者差別解消法を考えるというタイトルで今年の2月28日にNHKの視点・論点（10分間の番組）で話すように言われ、書いた文面を本日の資料として掲載しています。

津久井やまゆり園について私が何を言ったかということ、変な人が変なことをやったことに間違いはないのですが、そのことだけで処理してしまうと変な人を世の中からどける、変な人が入ってこないようにする、そういう対応しかしないようになります。実際、厚生労働省がやっている対応はそういう対応です。精神障害者の方にはひどい話で、精神障害者の方に対する対応がまずい、施設の安全管理がまずい、施設管理を強めるよう厚生労働省からの通知が全国にとんでいます。そういう対応だと同じようなことがまた起きますとここで示唆させていただきました。変な人はいます。変な人がいても、こういう事件を起こさないようにすることが大切です。津久井やまゆり園以外でも変な人が変なことをした事件が頻繁に起きています。川崎の老人ホームで3人をベランダから突き落とした職員がいました。同じような分類ができる事件かなと思います。どういうことかということ、相手が人間だと見えていません。この人は世の中にいない方がいいと思っています。人間はプラスマイナスの発想がありますから、私たちの心にもひっそり忍び込むことがあるかもしれませんが、思ってもやらないです。正しいことだと思いついでしまう環境が問題です。資料の29ページの表に津久井やまゆり園元職員の思考形態を記載しました。障害者は能力がない、食事ができない、排泄ができない、入浴ができない、全部お手伝いが必要な方々であって、言葉も話せない、果たして物を考えているかもわからない、そういうような見方です。人が代って判断しないとイケません。代行決定を他者決定しました。私が人生決めますという考え方をした訳です。あなたは世の中にいない方があなたにとっても世の中にとっても良いことだという考え方をしました。ナチスの優生思想ともちょっと違います。ナチスの優生思想はあなたがいない方があなたにとっても良いこととは思っていません。社会にとって良いことだと言っているだけです。津久井やまゆり園元職員が話した、書いたものを見ると、障害者自身にとってもいない方がいいという考え方をしています。彼自身の正義感であって、それを実現する行為に出ました。彼自身の正義を社会的に示す手段に障害者を使ったのです。こういう考え方はもちろん間違っていますし、我々が採用すべ

き考え方ではありませんが、こういう考え方を持つ人は時々います。普通は実行しないです。彼が実行したのは、実行したくなるような環境があったということです。障害者の方を能力がない前提で支援している施設があります。食事の内容・時間、入浴の時間を職員が代わって判断します。施設入所者の方で長生きされる方が多いというデータがあります。安全、健康管理が最優先されます。ご本人にとっても幸せな生活を考えているのかもしれませんが、大事なのは社会全体のバランスです。施設のスタッフ数、行政的な予算、家族の思い、ご本人の周囲にいる人たちの思いや考え、これを全部調整して、できることをやっていく生活になります。基本、障害者には能力がないという考え方をしています。代わって支援して、個人の生活を組み立てていく支援を管理型権利擁護といいます。障害者本人には保護の虐待となります。大規模コロニー型の施設はこういう考え方で設置されています。袖ヶ浦の事件も大規模な施設で、建物の構造や支援の質も同様の考えで動かされていたと事件の検証で確認しています。どういう支援をしていたのかというと、14人の人が袖ヶ浦の療育園という施設の中で暮らしていましたが、外からまったく何も見えない環境の中で、職員も閉じ込められる環境の中、昼夜一緒に暮らしていました。集団生活で飲み物を飲む時にも鍵が必要、電気を付ける時も鍵が必要、食事やお風呂は決まった時間に、職員の手がなくなったらお風呂に入れない、そんな生活をしていました。重度の知的障害の方は集団生活が苦手なはずですが、そういう方を何人も集めて集団生活を強要するというのが施設の生活です。若い職員がどういう支援をしたらいいかわからない中、段々自分の目が曇っていき、利用者さんが人間だと見えなくなります。そういうエスカレートした状況になったのが袖ヶ浦の事件です。刑事法廷で明らかになりましたが、最初は5人の仲間がいました。最初はパニックを止めるために一人の職員が殴り、殴ったらパニックが止まりました。パニックが止まるのはいいが殴るのはまずいので、人前では殴らないように5人の仲間で行っていました。一発殴ってもパニックが収まらなくなり、2発3発殴る、しまいに蹴る、エスカレートします。パニックじゃなくても殴る、蹴るところに行き着いてしまいます。相手が殴る対象になり、生きている人間だと見えていません。なぜそういう関係になっているかということ、人間的なコンセプトある生活が提供できていないからです。そういうことが重なって袖ヶ浦の不幸な事件になりました。袖ヶ浦もその後改革を進めていますが、かなり遅い改革になっています。津久井やまゆり園の方は千葉に比べて小規模分散型の改革でうらやましいと思います。千葉に比べて足りないなど思っているのは、津久井やまゆり園でどのような生活をしていたのかが分からないことです。報告書はたくさん出ていますが、いくら読んでも生活が見えてきません。被告は夜中個室をノックして返事がある人は襲わなかったと報道されています。返事をする人は能力のある人だから襲わなかったと報道されていますが、あれは嘘です。みんな眠剤を飲まされています。返事があるということは、眠剤が効いていない人がいたと刑事法廷で話したと思います。夜多くの方は眠剤を処方されていることが分かりました。津久井やまゆり園でどのような生活をしていたか明らかにならないと、被告が何を見て事件を実行しようと思ったのが

わかりません。管理型権利擁護で支援されてきたが、それは良くないと自立型権利擁護の方に施設も家族も傾いていっている時代です。能力がないことはありません。誰でも必ず思いや能力があります。何か思っていることがあります。支援者が確認できないことはあるかもしれませんが、必ず思っていることはあります。その思いをうまく適切に引き出して支援すれば、自分で自分の生活を決定できます。どこに住む、誰と住む、いつ食事をするか、自分で決められます。思いを組み取る生活の支え方や環境を整えようと社会は移っているはずですが、古い建物の中でも生活環境を変えていこうと努力している職員が多いです。本人の思いと社会性を尊重し、社会経験を積むことが人間としては非常に重要です。施設の中でずっと暮らしているというのはおかしいです。施設の職員、社会の人達と触れ合うことで初めて人間は生きていきます。人の助けなしに生きている人は、障害あるなしに関わらずいません。誰でも何らかの助けを受けて生きています。障害があってもなくても主体的に生きていますと言いますが、人と分離しているからです。母親と分離した瞬間に違う人間、分離している人間として独立しています。それが自立しているか、していないかは別問題です。分離している人間として主体性を持っています。分離した人間として平等であり、それぞれの思いを持っているはずだという前提で社会が構成されています。そのような社会感で支援を組み立てていこうという話が強烈に進んでいるわけです。移行しようという努力はしていますが、なかなか移行していません。障害者も能力があります。分離した一人の人間として、価値があります。そういう考え方を徹底していかないといけません。それをしないと同じように変な人が入ってきたら同じことをしてしまいます。鍵をかけて人が入らないようにしようというのは対応策としては逆です。もっと社会経験を積んでもらうような施設経営が必要です。グループホーム、在宅で暮らしている人も一緒です。津久井やまゆり園の事件を踏まえ、私が考えたこと、話していることです。

奈良崎真弓：にじいろでGO！会長

皆さんに問題を出したいので○×のカードを配ります。

初めまして、皆さんこんにちは。今日は私を呼んでいただきありがとうございます。

私はすごく最近嫌だなあと思ったことは、皆さんご存知、私ずっと横浜に住んでいて、神奈川県の記事が多いこと。川崎も神奈川県、座間も神奈川県、津久井やまゆり園も神奈川県。どうしてそんなに神奈川の事件が多いんだろう。

座間の事件の時は名前が出ました。川崎の事件の時も名前が出ました。どうして津久井やまゆり園の事件の時だけ仲間は名前を出さないんだろうとすごく不思議です。皆さんにも是非○と×で答えて欲しいです。もし自分が津久井やまゆり園事件の被害者なら、名前出していいよという人は○、どうしても出たくないよという人は×、考えてもらっていいですか。テレビに堂々と名前を出していいよという人は○、どうしても私はテレビや新聞に名前を出したくないよという人は×、どうぞ。ありがとうございます。×という人は何ですかと後で聞きたいと思います。私はこの津久井やまゆり園のおかげで、私の載っ

ているテレビや新聞を見ましたという人がたくさんいます。私の名前をほとんど知っていて、私をテレビで見た、新聞で見たという人、花屋さんで本当に仕事していたんですねとお客さんで毎回見に来る方もいらっしゃいます。この中で自分の名前ってなんだろうって最近、私はたぶん珍しい苗字で、私この苗字大っ嫌いなんです。真弓は全国でいっぱいいるから大好きなんです、苗字だけでいうと3、4人しか会っていません。奈良崎3文字の人は日本で2人くらいなんです。サッカーの檜崎と同じ字じゃないですかと聞かれますが、違います。珍しい苗字は嫌だなと思います。

どうして〇×を今日渡したかという不思議でしょう。私は当事者で、私が今日ありがたいなと思うのが、資料の漢字にルビがあることです。私全国で話していて、毎回いろんな資料をもらいますが漢字だけです。千葉県は条例があり、合理的配慮をよくご存じです。

どうして知的障害の人がしゃべれない、コミュニケーションが下手と言うのだろう。津久井やまゆり園について私が活動した事を簡単に話します。

私が津久井やまゆり園の事件を知った時は、朝早かったのでまだ寝ぼけていて兄に起こされました。テレビを見て、私なりに心が割れました。壊れました。しかし、障害者の仲間や親や関係者の方がお手紙やメールや毎回会いに来てくれて、皆さんのおかげで私がここまで戻ってきました。元気になって昨年11月13日に神奈川で仲間、支援者、関係者と話し合いをしました。津久井やまゆり園の事も大事なのですが、自分がどんな生き方をしているか等みんな自分の事ってあまり話しません。仕事、彼氏、家族の話は少し出ます。家族の話聞いて一番びっくりしたのが、父親と母親が亡くなって泣いたという人がいましたが、よくわからず笑っていたという人もいました。私はお葬式やお通夜に結構行きますが、行ったことがないから写真を見てもどうやって泣いていいのかわからないと言う人もいました。うれしかったことは何ですかという質問もしました。芸能人に会えてうれしいと思う人は〇、旅行が楽しいよという人は×、どちらが多かったでしょうか。皆さんも〇×で出してください。みなさん旅行なんですね。芸能人の方2人いますね。障害者のみんなも旅行が多かったです。他の質問もしました。育成会の本人活動や全国大会で友達ができ楽しかった〇、新幹線・飛行機に乗れてうれしい×、どちらが多かったでしょうか。正解は×が多かったです。人と人の付き合いは難しいですが、新幹線や飛行機は遠くに行ったという感覚があります。津久井やまゆり園のみんなが亡くなった時、最初は悲しいとか怒るとか言いますが、実際問題は自分の関係者じゃないからわからないというコメントが多かったです。

私は津久井やまゆり園の活動を全国いろんな所でやっています。育成会の仕組みも変わり、津久井やまゆり園の事は育成会の本人活動ではあまりやっていません。すごくやって欲しいなという願いで今日も来ました。どうしてかという今年私北海道の育成会全国大会で仲間の話を聞きました。津久井やまゆり園の事は非常に知らなかったです。北海道は元々当事者育成会系はピープルファーストの関係でコラボなので、ピープルファーストの仲間は情報は早いです。大阪は特にピープルファーストの仲間が強いです。福島の育成

会は親の会で運営していますが、活動はピープルファーストの仲間なので、そこで情報を集めていて、その時にどうして津久井やまゆり園を知りましたかと聞いたら、テレビや新聞を見たから、ラジオを聞いた、どうして育成会の本人活動の仲間はやらないのと全日本の仲間と言われました。ピープルファーストに参加しているときに、ピープルの仲間は自分の大事な運動をしないといけないのに、育成会のみんなはなぜ運動しないのと思いました。皆さん考えてください。どうして運動できないのでしょうか。例えば宮代先生がやっているひまわりの会、こあらの会、いっぱい千葉にも本人活動の会があります。どうして津久井やまゆり園の事は言わないのでしょうか。すごく疑問でした。先程佐藤先生も知的障害には経験が必要だよねと言ってくれましたが、でも実際は情報がないのが本音です。私の母親は軽い認知症で、父親は脳梗塞で寝たきりの身体障害者です。兄がうつ病で精神障害者です。こんな家族で津久井やまゆり園の話が平気でします。私には兄がもう一人いましたが、亡くなりました。その兄は重度で言葉も話せません。コミュニケーションをどういう風にするのかわかりません。当事者の声と言うが、障害者の兄弟、仲間の中に兄弟で障害者もいます。私はいつか兄妹で津久井やまゆり園の話をしたいです。ピープルファーストも育成会の活動も同じで身体障害のチームの人でも話を聞いたことがないです。それでぜひこの先進めないといけないのではないかと私なりに思った時がありました。

シンポジウムをした時、知的障害者に分かりやすく説明してくれる方は誰もいません。在原先生や佐藤先生は私の前で今日安楽死という言葉を使いました。私は理解できますが、もしここに私のような仲間が来た時にそれってすごく難しいじゃないですか。カタカナって日本語で知的障害の人に分かりやすく伝えるって難しいです。用語をわかりやすく伝える、話すってどうやればいいんだろうねと津久井やまゆり園の事件を通して仲間に伝えようと思い、悩んでいる事です。是非皆さんのアドバイスをもらいたいし、教えてください。

私が考えた津久井やまゆり園の目的運動。1、障害があっても差別をしないこと。最近よくどんなことが差別か聞かれます。堂々と障害者が嫌いと言うのは、私はウエルカムです。陰口は差別に近いと思います。本日は分かりやすい資料だなと思いましたが、神奈川県委員会や横浜市の専門家の話で、私でも読めない資料をいただくことがあります。津久井やまゆり園の植松氏の手紙をわかりやすくルビをふってどうやって伝えますか。差別解消法が変わりました。本人には全然分かりません。その時に一番注意して欲しいのは、私達は津久井やまゆり園の建物も知りません。施設ってどんな所かも知りません。施設と自宅とグループホームの違いが分からない本人がたくさんいます。気を付けないといけないのが、建物を見に行つて絶対忘れないことかなと最近自分なりに思いました。私は毎年津久井やまゆり園の近くにクリスマス飾りを見に行つています。実際自分で見て感じたことが大事かなと思います。命は犬や猫や猿もあります。命は皆大切にしたいなと思いました。

私がやっているにじいろ GO! の活動を見せます。(DVD)

このワークショップは何をやりたいのかというと、本人達はしゃべるのが大好きなので、

私の声、心の声はどんな顔という顔の絵カードを使って、みんなに貼ってもらいました。津久井やまゆり園で19人が亡くなった事をどう思うか聞くと、怒ったと言う人も多く、もう嫌だと言う人もいました。ぷんぷんぷんぷんと言う人もいました。そうやって仲間の声を拾っています。一番私達で多かった声は、泣いたという声が多かったです。中にはわーって言う人もいました。事件が分からない、何をしたいか話か分からない、ばにくったという意味だと思うんです。私の活動は、にじいろGO!でして一年経ち、来年は何をするんですかと皆さんに期待されるのですが、にじいろGO!の出前配達をします。ワークショップを是非みんなと感じて、命の大切さや自分って生きていいんだよねということに繋げたいです。是非千葉の皆さんと私と仲間と一緒にやれるといいなと思っています。是非お母さん達ともやりたいです。

在原 氏：泉氏は息子さんに一人の市民として生きて欲しい、役に立つような活動をして欲しいとお話されていました。多様な価値を認める社会であって欲しいとお話されていて、共生社会を考える時に当然大事で、いろいろあっていいよねと認めること、自分とは違う価値観等を踏まえて関わろうとするという事がまた一つハードルがあるというのか難しいところですが、それぞれが社会で認められ力を発揮し、いきいきと生きていけるようにするということが必要だと思います。

奈良崎氏のお話はやはり驚くほど活動的で仲間や協力者がいて、すごいなという印象を持ちます。奈良崎氏は力があるから出来るよねと言われることがあるのではないかと思います。そういう言い方もできるし間違っていないと思いますが、たぶん奈良崎氏は経験の積み重ねと頑張り、仲間づくり、またそこで求められ、いろんな経験をし、積み重ねで今の奈良崎氏があると思います。協力する周囲がいる、増えていくことがあります。奈良崎氏みたいにできない人もいます。グループホーム学会で支援する中で、経験を積み重ねていくと、どんどん自信をもって発言するようになっていきます。どう思いますかと聞かれることで、考えるようになります。最初から経験しない時の力が問われても駄目で、経験が全てではないが重要だと思います。それを支援することが重要です。

佐藤先生のお話の中で、入所施設の入所の方が能力がないと思われていたというお話がありました。経験で能力が変わっていくだろうし、どういう場で人に囲まれ、対応され、生きていくか、人の力は切り離せません。どんな人が周りにいるか、どんな風に扱われるか、そのことを抜きに個人の能力は考えてはいけないと思います。そういった対応で支援していった方が支援者としてもやりがいがあるだろうし、そうではない環境だったのかなと思います。正直、佐藤先生のご指摘の通り、支援の実態は見えませんでした。施設長からも話を聞

き、施設にも行きましたが、日常的な支援の実態は正直分からなかったです。イベントや地域との交流、外から人がたくさん来ていますという話はあって、部会として日常を踏まえるべきではなかったのかというご指摘はありました。そこがとても不十分だったところではないかと思っています。わからないのでそこについては何も言えません。まだお話足りないところがあると思いますので、もう一度お戻しして一人一人言い残したこと等があればお話ししていただきたいと思います。

佐藤 氏：津久井やまゆり園と袖ヶ浦の事件では共通することが多いです。袖ヶ浦は施設が加害者側、津久井やまゆり園は施設が被害者側になっています。外から侵入され、ひどいことをされたという被害者なので、日々どういうことをしていたか等を調べる発想にならなかったのかなと思います。袖ヶ浦の場合は加害者側なので何を日頃していたのか個別支援計画や日誌を含めて全部調べました。書類は整っていましたが、やっていることが違うということがたくさん出てきました。津久井やまゆり園は被害者側になるので、行政側は調べていたかもしれませんが、公表されていません。津久井やまゆり園の人には、こういうことを言うときついかもしれませんが、加害者は植松氏かもしれませんが、施設は純然たる被害者なのかということです。施設の支援を見て人間扱いされていないと思い、そういうことに走りました。人間扱いしていない施設の支援が植松氏を生んだと思います。同じような立場の立ち位置に立つ可能性もあります。ああいう事件を起こす施設としての内製はあります。どうしてそういう施設があるのかというと、そこに障害者の人を送り込んでいる人達がいるからです。送り込んでいるという変ですが、家族も本人があそこに住んでいて安心していると思っています。移すとなると家族の人達は反対します。なぜなら、いたるところで利用を断られて行く所がありません。家庭で生活できず、最後受けてくれたのは津久井やまゆり園だという発想だと思います。大規模コロニー型を作って、そこに障害者の方に住んでもらって安心している人達がいます。地域に住んでいる人達です。障害者の人達に地域から離れたところに住んでもらって、地域は安心しています。この犯罪性、我々自身、皆が加害者なんだという認識を持たないといけないと思います。その認識をどれだけ国民に共有できるかです。障害者を見えないところに押しやっている現実を知ります。障害者数と高齢者数が増えている中、社会から排除されてきた人と共同戦線して共通認識を作っていきます。加害者側の立ち位置があり得るんだと、そういう認識を深めていくことを皆で考えないといけないのかなと思っています。

泉 氏：一つ疑問に思っていることは、この方(植松氏)が支援の中で何かあったのではな

いかと思えることです。いろんな施設の職員を見ていて、突然そんな考えになるのでしょうか。中の支援を見たことで彼が変わったとしたら、変わった時に支援の中に何か出てきたと思います。その支援の在り方がもし虐待だったとしたら、障害者虐待防止法があって通報義務があります。その通報義務を施設が怠ったのではないかとちょっと思ったりしました。情報ない中で言うことではないと思いますが、可能性について在原先生にお聞きしたかったです。

在原 氏：可能性の話をするには、事実が分からないので難しいですが、そういうことも考えられるというのは確かにそうだろうと思います。

泉 氏：あまりにも唐突だから、あの行動が。あれに至るまでの昨日今日の話ではなく彼が務めていたのはずっと前じゃないですか。そうするとその間にきっと何かあったのではないかと思うのが普通じゃないでしょうか。なぜそう思うかという、入所施設はあってはいけないものと一時言われましたが、選択肢の一つとして、強度行動障害の方の行き先として、家族の事を思うと入所しかありません。そういう時にやはり入所施設の存在意義はあるかなと思います。そういう方じゃない方が施設の中に百何十人もいたら、本人が行きたいと言って施設に行かれたかは疑問で、施設の安心・安全な生活っていうのが親にとっての安心・安全なんじゃないかなと思えます。確かに私も今寝たきりの息子を施設に入れると安心です。誰も見ないよりは施設で見てもらった方が絶対安心です。でも、今回のことで施設はそんなに親が安心できる場所じゃないんだと思知らされました。きっとこれから施設の在り方や支援の質を考えれば施設も一つの選択肢としてあるのかなと考えているところです。

在原 氏：津久井やまゆり園に限定せず言いますと佐藤先生が職員も入所施設に閉じこめられているとおっしゃっていました。そこだと思います。入所施設で働いていても外と繋がるような、外と共同するような支援の仕方が職員にとってもいいし、視野を広げ、経験や気付きがあり、成長にも繋がると思います。そういう支援がされれば本人にとっての広がりにもなります。入所施設はやはり機能として求められている部分を充実させていくことが必要だと思います。必ずしもゼロにすればいいという話ではないと思いますので、入所施設での支援者の働き方、支援の仕方も入所施設は地域の一資源として繋がって支援していけるように進めることが重要だろうと思います。

奈良崎氏：私のいろいろな経験について皆さんに話します。

私は生まれてからこんなにしゃべりません。でも、へんちく君と言われていま

した。私、髪の毛がないです。ずっとストレスで人間関係に疲れて髪が全部落ちる人で抜けちゃいました。それが何十年も続いています。私は小学校の時に普通学級で初めて自分の障害が分かりました。

私がラジオで話した内容を聞いてもらおうと私ってどんな感じっていうのが分かると思います。

『大竹八犬伝～ザ・ゴールデンヒストリー』

昨年7月28日神奈川県知的障害者施設津久井やまゆり園で入所者が襲われ19人が犠牲になりました。障害者は不幸しか生まない。彼の言葉は同じ障害を持つ人達に波紋を広げます。日々黄金の歴史あり、ザ・ゴールデンヒストリー、今週は津久井やまゆり園事件と私達というテーマでお送りしています。

私の心は壊れました。奈良崎真弓さんは39歳、知的障害者です。障害が分かったのは小学校5年生の時でした。友達と楽しく過ごしていた日常が担任の先生の一言で一変します。うちのクラスにはね、障害者はいない。教室の片隅に一人離れて置かれた机、休み時間も他の生徒に近寄ってはいけないと言われます。いじめも始まりました。上履きの中の画鋲、牛乳をかけられてふやけた給食のコッペパン、金を持って来いと脅され、震えながら父の財布に手を出します。毎日私は学校に行きました。家には重度の障害者の兄がいて、話すこともお兄ちゃんできなかつたけど、私が元気ないと悲しい顔をするんです。それに家族を笑わすのが私の役目だったから。元気な顔して私は学校へ行きました。10歳で真弓さんの髪は全部抜けます。極度のストレスが原因でした。養護学校を卒業後、介護施設で働きます。困っている人のお世話をしたいと兄を見て思っていたのです。夢が叶いました。しかし、障害を上司だけに伝えていましたが、読み書きや簡単な計算に戸惑うことがあったため、やがて同僚達が気付きます。同じ給料なのはおかしいと言われ、肩身の狭くなった真弓さんは2年で職場を辞めました。恥ずかしく言えなかつた障害を真弓さんが隠さなくなつたのはアメリカで開かれた知的障害者の集まる福祉団体から派遣されたのがきっかけです。すべてをオープンにして社会の中で胸を張って生きる人達がそこにはいました。帰国後、障害を伝えた上で再び仕事に就きます。昨年7月、津久井やまゆり園事件、真弓さんの心は壊れます。衆議院議長に加害者が送った手紙の中に小学生の時に先生から言われたあの言葉があったのです。障害者はいない。眠れなくなりました。辛くて心がちぎれそうでした。真弓さんの心の痛み周りの人達が気付いて支えてくれます。私は一人で耐えたあの時とは違いました。私達へ真弓さんからの伝言です。私は辛いことがあるのに生きる意味だと思いました。ラジオを聞いている人達に生きていて辛かったことは何ですか、良かったことは何ですか、私たち知的障害者をどう思いますか、皆さんの話が私は聞きたいです。友達になりましょう。髪の毛を失ったままの頭で

バンダナを巻いて3年前から友人の営む花屋で働いています。友達が増えていくたびに生まれてきて良かったと思います。

ラジオでインタビューされて、皆さんからはどうしてこれをやったんですかと聞かれました。今年になって私自分の障害の事で詩も書かせてもらいました。植松氏が障害者はいらぬよと言うなら、反対に障害者は自慢できるよと私は自慢します。私は知的障害を自慢しようと思って、いろんなことで今年はやろうと思っています。植松氏は施設の中で現場職員であり、もったいない才能を駄目にしちゃったことは辛いです。施設の中身や雰囲気も分かりません。先週も第3者委員として施設にお邪魔して、施設職員と話をしました。施設職員って楽しい、どこが生きがいですかと聞くと、皆聞かれた事がないので目が大きくなって、何でそんなこと聞くんですかと言われました。利用者さんの気持ちになれば、利用者さんは職員と同じように施設にいるわけじゃんと話しました。親亡き後が心配と泉氏も話していましたが、反対に子供は子亡き後が心配だと言っています。私は子亡きノートというのを作りました。親にこういう風になって欲しいと全国の本人さんと話しています。子亡き後ベスト3位、お母さんに子供が何を残したいか。お金だと思ふ人○、お金じゃないと思ふ人×、どちらでしょうか。正解はお金です。本人は先に死んだらお母さんの老後が心配だからお金を残しておいてあげようと思っています。お母さんたちの年金が障害年金より少ないのは知っています。2位は思い出、へその緒です。1位は、障害が軽くて重くても私達はお父さんとお母さんに一回死んでも帰って来てと、戻っておいでと言って欲しい。一年に一回でも好きなものを備えて、会いに来て欲しい。いつもきれいなお母さんの笑った顔、怒ったお父さんの顔を見せてくださいと言っています。以上でした。

質問

在原氏 : 支援の人的環境、少しずつ広げて限定しない方がいい。広げた方が人生の幅として良いという話をした繋がり、質問をいただきました。人との繋がり方を学んだり、障害のある人を知ってもらう場として小学校、中学校など教育の場が重要だと思うけれども皆さんはどのようにお考えですかという質問です。先程、奈良崎氏のお話にすごく辛いお話が出てきていましたが、私としてはすごく重要だと思っています。教育の場を分けない方向で、教育の場そのものを変えていければ理想です。分けない環境で育った方がいいと思っています。つまり教育でどういう能力を求めるか、身に付けさせたいか、何を目指して教育するかという事です。地域社会では隣で普通に暮らしているのに、遠くの支援学校に行くと離れてしまいます。支援学校の中でもコミュニティができて、親の繋がりもできていきますが、その特別な枠組みを出て社会で生きていく事を考

えたら、今は分けない方向が良いと思っています。いかがですか。

奈良崎氏：どんな支援がハッピーですかと最近私は聞かれます。私は小学校4年生まで普通級で障害と分からず生活していました。その時に、支援者という言葉が大嫌いで、障害者と支援者が関係なく同じ言葉を出せば、そこで繋がるじゃないですか。幼馴染で仲の良い男の子と3歳からずっと付き合いが長くて、その子とよく言うのが、「ごきげんいかがですか?」「飯食いにいこう」という言葉です。ベランダ越しで会話しています。そういう会話でいいと思います。それが私達って生まれた時から同じ地域で感じ、見るのが一緒だし、無理して分けてもどうせこの社会って健全者と障害者も動物も赤ちゃんも一緒に生まれている訳だから、出会ってみて感じてもらえるといいなと思います。無理して最初から障害者の村を作っても、社会に出て挫折する訳だから、最初から私ってどんな人と感じてもらって、それでいいのかなと思います。

泉 氏：インクルージョンの教育で正解だと私は思っていました。ただ、目指すのであれば親はその子の状態を必ずしっかり正面から向き合って、その子が普通学級の中でついていけなくなりそうだ、本人にとってストレスになっているというような信号を見逃さないようにして欲しいです。インクルージョンでいいんです。ご本人がSOSを出した時にキャッチするのは親なのか先生なのか。キャッチしないで通過してきて、将来ご本人が壊れてしまったというケースがあります。私は今、後見人としてその方に関わっています。その方の場合、本当に普通でよかったんですけど、途中でたぶん本人がSOSを出した時が絶対あると思うんですね。それを見逃さないでインクルージョンを実行して欲しいなというのがお願いです。

佐藤 氏：大学の教員として教育に携わって30年になります。人を教えるは難しいです。教育の場もいろいろあって、大学も障害をもった学生さん、特に知的障害を持った学生さんを受け入れようという動きがあり、発達障害の方もたくさんおり、その方々を支援するために専門のセクションを設けています。大きな方向としてはインクルージブな方向性だが、特別支援学校の入学希望者はむしろ増えており、中学校であれ高校であれ増設しています。親御さんの方から見たら今は特別支援学校の方がむしろ子供にとって良いという考えがあります。おそらく普通学校が怖いのだと思います。通常学級が個性をもった教育ができていないか、ただ単に混ぜれば良いということではなく、それぞれの個性を見ていないといけないし、特別学級にいる子の個性も見えていかないとはいけません。一人一人どういう個性を持っていて、どういう教育をするのかが見えていないと、ただ混

それでもそれはご本人にとってしっかりとした教育を受けた事になりません。今の制度の仕組みは通級であれ特別支援学校であれ、どこに行っても変わらない。しかし、比較してみると親御さんの目から見ると特別支援学校の方が人数も少なく、教師も多い、手厚い教育がしてもらえそうだという期待があり、増えている気がします。根底には個性を見て欲しい、どういう教育をするのか、そこがあればどういう形態でも大丈夫、大きな方向としてはインクルージョンでいいと思います。学校教育事態が閉鎖性をもっているので、学校教育自体がもっと開放性を持たせないといけません。袖ヶ浦は大規模コロニー型のそばに必ず支援学校が併設されています。袖ヶ浦には東京都の施設があり、400人程生活されています。施設のそばに東京都の特別支援学校があります。袖ヶ浦の福祉センターのそばにも県立の特別支援学校があります。そちらに幼児施設の人達が通って一日過ごして施設に戻ってきます。行き来数百メートルしか動きません。それで一日終わります。袖ヶ浦で亡くなった方が18歳を過ぎていたので、特別支援学校に通っておらず、完全にどこにも行かない、そういう生活になってしまいます。完全に閉鎖された中で生活していました。割と船橋の学校は開放性がありますが、世間一般には学校に変な人が入ってきたらまずいと言って、閉じたような形で外にも出ていかないという教育が多いと思います。

在原 氏：ご質問していただいた方の趣旨のように、教育の場で自然な形で知りあって、私ってこういう人だと知ってもらうのが良いのではないかということでした。奈良崎氏の経験でもお辛い経験があったように、個性を受け止めてもらえない教員がいたり、子供同士の出会いもいいものにできないと、出会い方が放置されてしまいます。個性を生かせるような教育をしないとダメです。今のままでは先生達が大変だろうと思います。国として教育にお金をもっと使わないといけません。混ざり合って分けなくて教育を良いものに生かしていくことが難しいと思います。それができればすごくいいなと思います。

もう一ついただいたご質問です。私の話の中で津久井やまゆり園入所者の本人の意向を聞いた方が良いという意見がたくさん出て、それを受けて神奈川県が部会を立ち上げた事、本人の声を聞いたのか、聞きなさいという声に家族会の方がすごく責められたように感じて辛かったというお話をしました。どうして責められたように受け止めたのかというご質問です。この質問をされた方がどの立場の方か分かりませんが、私の理解では本人にはあまり丁寧に聞かず家族の意見で建て替えましょうと県は決めました。本人に聞かずに家族に聞いて決めたので、それを受けて本人に聞きなさいという意見が出たということは、家族が決めちゃいけない、家族が本人を思って決めたのに、それをすごく否定

された気持ちになり、すごく辛かったという事だと理解しました。

佐藤 氏：家族としてはよく分かる反応です。本人のために施設に入ってもらう事を選択した親御さんがいらっしゃるかもしれませんが。多くの場合はそうではなく、喜んで入れている訳ではないけど、他に受け入れる所がない、親の都合で入れているという潜在意識があるんです。後ろめたさというか、他に選択肢がない、ごめんねという思いでいる親御さんが大変多くて、そこを指摘されると辛かったのではないかと。

泉 氏：私もそういう風に感じます。私が親だとしたら、入れたくて入れた訳ではないのに、親が決めたことを否定された、今までやってきた全てを否定された気持ちになったのではないのでしょうか。私としてはご本人がどんな状態であっても、ご本人が喜んで行ったとは思えません。やはり親のそばにいたかったというのがご本人の思いでしょう。何とかこの事件をきっかけに、少し親の近くに施設ができるのであれば、そちらに移動することができれば、良かったなと思います。最初は元の大きさと建てるということでしたが、2つに分かれて一か所はもっと横浜に近い所で、本当に地域生活ができると言われているような場所だと思うと、前よりは良い案だったのではないかと思います。

佐藤 氏：どこに住むかの意思決定支援ですね。本人が住みたいと思う所に住んでいただくというのが理想ですが、経験しないと分かりません。よその場所に住んだことがない人にいきなりどこに住みますかと言っても何も答えられません。GHや一人住まいなどいろいろな事を経験してもらい、GHだから良い訳ではなく、まわりの環境もあるでしょうし、人間関係もあるでしょうから、良いところと悪いところが人によって違うと思います。それを何度も何度も、何か所も経験してもらう事が必要なので、時間がかかります。時間をかけても本人の居場所を選んでもらいましょうと動いています。今の特別支援学校のお子さんは事前の体験をやりますよね。経験を積んでもらうことが必要です。今、津久井やまゆり園の方では2年位の時間をかけていろいろ経験してもらって、それで選んでもらいましょうとやっているようです。2年でも短いと思います。親御さんが最初施設に入れる時は丁寧な事をやっていません。そこでご本人は我慢しているようにしか思えません。意思決定支援には時間がかかります。それをやるのが初めてご本人にとって人間扱いされているという事です。うらやましいのは神奈川県に受け入れ法人がある事です。同愛会と県央福祉会が受け入れを表明しており、力強いです。残念なのは千葉県内ではそういう法人がありません。それぞれの法人の都合もありますが、ここが千葉と神奈川の福祉の関係者

の力の差みたいなものをまざまざと見せつけられたなと思います。

在原 氏：もう一つのご質問です。発達障害者地域支援マネージャーについて、もうちょっと説明をという事です。私が支援者をどう支えていくかが大事だという話をしました。支援者が長く関わっていれば分かるという訳ではない障害特性もあります。外の人からコンサルテーションを受けたり、アセスメントの苦手な部分に助言をもらうことが有効じゃないかという話をしました。発達障害者地域支援マネージャーは、基本的には国として進めていると思いますが、発達障害者支援センターなどに今まで以上に人を置いて、事業所支援をする人を配置する事です。個別のケースを受けるのではなく、事業所に出向き相談を受け、事業所で支援している人のアセスメントと一緒にしていく役割の人です。全国一律で動き出したということではないかもしれませんが。横浜、神奈川県では始まっています。始まったところなので、成果としてはまだあまり把握していません。事業所をバックアップする存在は重要ななと思います。

質疑応答

私、昭和20年生まれですが、小学校の時にクラスに障害を持った生徒がいました。ある日突然、他の学校に移りまして、なんだか意味が分からなかったです。定年後ボランティアをするようになり、障害者の理解がようやくできるようになりました。泉氏へ聞きたいと思ったのが、しぐなるあいずでは松戸市から委託を受けて2年に一回研修をおやりになっていて、市民の方に協力委員という格好で何かされていらっしゃるようなお話を先程伺いました。つくづく思うのですが、今回のテーマにあります津久井やまゆり園の件も十分障害者の方の理解が一般の方はなかなか持てないと思うんです。昨日もあるところに行ってスタッフの方と話したら、あの方は皆が歌を歌っているときに口では歌の声は聞こえないけれどもスタッフの方によると歌っておりますと、よく見ると口元が動いている、そういうお話を伺うと障害者の方、みな接し方が違いますよね、市民に障害者を理解してもらうための研修や市民の方がやっている内容を教えていただきたいです。

泉 氏：しぐなるあいずの市民協力員という方と専門職がペアを組んで、ある一人の方の後見人として活動します。ご本人が施設にいます。施設の行事はありますが自分が一人で買い物に行きたい等があれば、市民の方や専門職と一緒に付いて行きます。そうすると月に2回はご本人に会って、回数を増やす、信頼関係を作るようにして、関係性を持つようにしています。弁護士のような司法の専門家じゃなくてもご本人にとっては誰であってでもいいのです。ご本人にとって相性のいい方、意外とこれが市民の方で相性のいい方がいたりします。相性の悪い場合もありますが、いろんな組み合わせをしながらご本人の支援にあ

たっています。一番わかりやすい支援としては、訪問して月一回は本人の様子を確認して、報告書を出してもらい、市の方に報告します。

佐藤 氏：西宮に青葉園という重度障害者の方を支援している組織があります。そこがバックアップで支援されている方で、たりのさんというテレビにも出ている女性の方がいます。この方は重心の方で言葉がありません、体も動きません。ずっと移動するベットの上で寝たきりです。しかし、この方は現在アパートで一人暮らしをしています。医療的ケアのある施設にずっと入っておられましたが、阪神大震災もあり、施設が移る、移らない等があつて、結局最後落ち着いたところが自分のアパートを借りての一人暮らしです。24時間全介助です。その人はしかし、どうしてそういうことになったのかというと、ご本人の希望なんです。言葉がないのになぜ分かるかということ、支援者がついていって喜ぶ喜ばないの表情を見ていました。長い時間、何年という時間をかけて確認していくことによって、最後辿り着いたのが一人暮らしです。支援する人は大変な思いをしておらず、たりのさんが返してくれる笑顔、これを支援する人が見ることによって、支援する人たちも励まされます。これを総合支援、総合エンパワメントと言うらしいです。そういうことが可能です。ここへ植松氏が来たらどうなりますかと園の責任者の方に聞いたことがあります。絶対同じことは起こさないと自信をもって言われました。なぜなら、ここは人間は人間として扱われているからだと言われました。そういう支援をしています。そういう支援をすることがこれからの日本で大変重要だと思っています。

泉 氏：奈良崎さんの話を聞いて目からうろこというか、子が先に亡くなるなんて考えたことはありませんでした。息子の気持ちを帰ってじっくり考えてみたいと思います。奈良崎さんの質問は私にとって有効な知識になりそうです。

奈良崎氏：話を聞いてくれてありがとうございます。いろいろな準備、事務局ありがとうございました。生きるって何を生きるというのかなと私はよく思うんです。私は老人施設や花屋でおじいちゃんおばあちゃんと喧嘩しながら生きていますが、その時におじいちゃんおばあちゃんに私の良い所って何ですかと聞くと、まみちゃん機嫌が悪いとお仕事しないでお腹が空いたと言うよね、花屋の仕事より食べること大事って言ってるよねと言われます。そうなんです。人ってそんな簡単だと思うんです。コミュニケーションって。お腹が空いたら仕事しないって顔をしているそうです。でも私は花嫌いなのに何で花屋にいるのと聞かれます。人が大好きで、人をみて勉強させてもらっています。まみこの部屋というのを一年に3回地方でやっていて、最近まみこの部屋も人気が出て、

まみこと一緒に老後手帳を作りましょうと言って、全国のおじいちゃんおばあちゃんと作っています。みんなで発想豊かにすれば支援者も支援者手帳が欲しかったら作った方がいいと思うんです。支援者が一人で考えることができなかつたらその手帳を見て全国で繋げようよ、悩んだ時は支援者も聞いて欲しいんです。いっぱいお母さんが全国にいて、全国のお母さん28か国を作っています。何でかというところへ行くとお腹空いたとわがママを言うからです。人ってわがママと愚痴って違うじゃないですか、甘えるわがママをどう判断するかというと、人と人がうまくできればわがママOKなんです。人ってむかつく殺したいと言えば殺さないと思うんです。佐藤先生が言ったように人を人が駄目にする時って何を思うんだらうなって私も時々そう思うんです。人間ウォッチングしよう、心の声を聞こう、私のポイントです。また皆さんと千葉と付き合いたいのでまた呼んでください。以上です。

在原氏 : いろいろなお話が聞けて、私も皆さんの前でお話ができありがたかったです。それを受けて皆さんに質問をいただいたり、話を広げていただいたり、深めていただくお話を聞けて、本当に良い経験をさせていただきました。ありがとうございました。